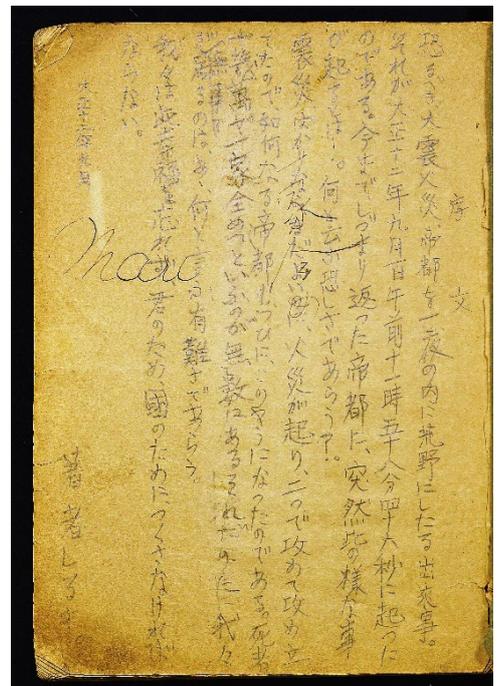


#### (4) 社会的関心の芽生え

丸山が四谷第一尋常小学校に転校したのは、皇太子（のちの昭和天皇）の摂政就任、原敬の暗殺など歴史的事件が目まぐるしく起こったところであった。丸山自身も原暗殺事件の際、幹治が夜中に出社していったことを記憶している。

そのなかでも、のちの戦争に匹敵する強烈な体験となったのが1923(大正12)年の関東大震災である。地震による避難経験もさることながら、朝鮮人虐殺の風聞は丸山の耳にも届いていた。母セイは「長谷川（如是閑）さんでさえ朝鮮人のうわさを信じた」と語り、パニック下でのデマの浸透力を印象づけている。さらに震災直後に起きた甘粕事件で、大杉の幼い甥までも殺されたことにショックを受け、社会的関心を強く喚起された。また、同じ年に起きた虎ノ門事件については、死刑判決の際に犯人の難波大助が「共産党万歳」と叫んだことを聞かされるなど、ジャーナリストの父を通じて機密情報にもある程度触れていた。丸山は震災の経験を作文「大震災大火災」「大震災火災中の美談」『恐るべき大震災大火災の思出』にまとめている（画像：丸山眞男『恐るべき大震災大火災の思出』〈丸山文庫資料



番号341-5))。このうち「大震火災中の美談」は、東京市学務課主催の「震災記念作品会」に出展され、『震災記念文集 東京市立小学校児童』尋常4年の巻(培風館、1924年)に掲載された。丸山の文才をもっとも早く物語るものといえよう。